Ⅳ-26　公園緑地に対する市民意識の分析

北見工大　正会員　○塩田　衍
北見工大　正会員　加藤修一
旭川市役所　道塚重孝

1．はじめに　都市の生活空間における公園緑地は環境の浄化，都市景観の演出などの効用を持っているが，我が国では，過度の都市化による環境低下に対処するための公害防止，防災時の避難場所などの効用が前面に出ているように思われる。しかしながらいずれにせよその実態はまだまだ不充分なものであり，都市における公園緑地は，市民権としてのコミュニケーションの場，あるいは生活権としての子供の遊び場，心身の休養の場として，より積極的な活用をはかる必要があろう。殊に地方中小都市においては，公園緑地の持つ「緑」の効用としてよりも，都市施設としての効用が大であり，その整備が待たれるのである。

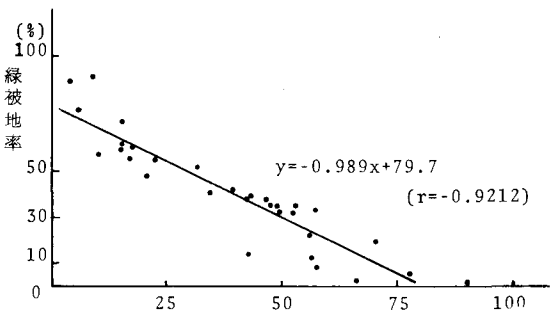
本論は，地方都市として北海道北見市における公園緑地の量的，質的実態とそれに対する市民意識の分析を行なったものである。

2．人口密度と緑被地率等の実態　北見市は北海道のオホーツク海斜面における地方都市で人口は約9万人であるが，道東の中核的な都市機能を有している。この北見市の都市公園1人当りの面積は市域内で約7.4 m²（昭和48年6月現在）であり，都市公園法施行令に言う6.0 m²を上まわり，全国平均2.7 m²，全道平均6.9 m²を越えている。しかしながらその実態は用地を確保し，規定の施設を配置したというハードウエアどまりのものが多く，各種都市公園の適正配置，地域的特性などの細部の検討が不充分なため，有効利用を妨げている例がみられる。本研究は北見市の都市計画区域2475 ha を31ゾーンに分割し各種解析を行なった。このうち各ゾーン毎に生産緑地や寺社の境内等を含めた広義の緑被地と都市化の尺度としての人口密度との関係を示したのが図-1である。この回帰式は　GR＝－0.989 PD＋79.7

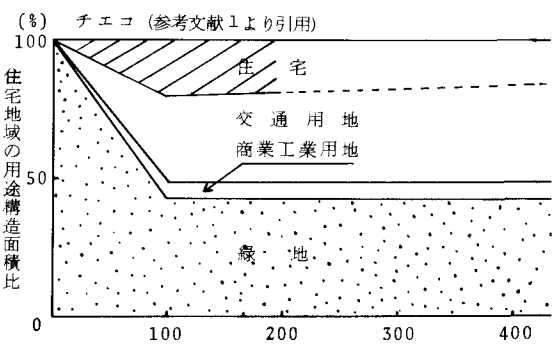
但し　（r＝－0.921）

GR：緑被地率（%），PD：人口密度（100人/ha）

である。この様に都市におけるオープンスペースが都市化の進展とともに蚕食されていく傾向は我が国の都市においては一般的な現象であろうが，例えば図－2のチェコの住宅地域における場合と比較すると彼我の都市計画における考え方の相違がみとめられる。すなわちチェコにおいては人口密度のいかんにかかわらず43%以上の緑地を優先的に確保する方策を講じている。



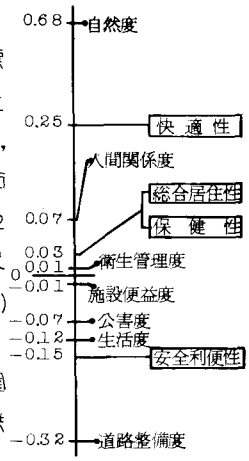
図－1　緑被地率と人口密度



図－2　チェコの住宅地域の場合

3．市民意識調査とその分析　北見市では昭和47年6月，市民生活環境意識調査を実施している。これは市域を59地区にわけ，各ゾーンからサンプリングされた1805人（回収数1661人，回収率92%）に対して

28項目からなる生活環境指標に対して五段階評価による回答を求めたものである。この28の評価項目はa）快適性、b）保健性、c）安全利便性の3つの総合化指標に分類され、またa）は自然度（項目数4，以下同じ），人間関係度（2），生活度（4）から、b）は公害度（5），衛生管理度（6）から、c）は道路整備度（4），施設便益度（5）からなっている（一部重複項目あり）。これらの指標に五段階評価（大変良い，良い，普通，悪い，大変悪い）の得点化（それぞれ2，1，0，-1，-2点）した単純集計による総合居住性を示したものが図-3である。すなわち北見市民は都市の生活環境に対して快適性のなかの生活度や、安全利便性などがマイナス（不満）でありながら全体としてプラス（満足）であることを示している。この単純集計は個々人の満足度の度合が反映されず、また得点化にも問題があるが、次項ではさらに公園緑地に関する項目すなわち自然度に属する「緑の豊かさ」および生活度に属する「子供の遊び場」につき注目しながら解析を行なう。



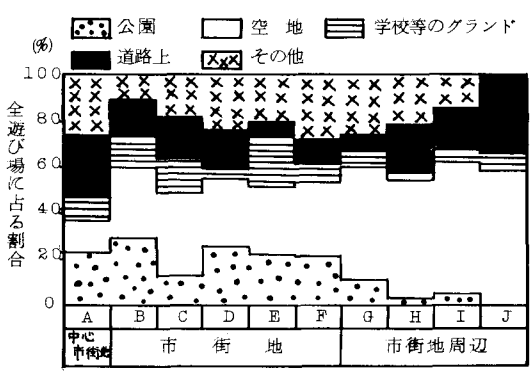
図－3　生活環境の満足度

表－1

項目	環境評価28項目中の順位		都市施設36項目中の要求順位	項目
	満足度	偏相関係数		
緑の豊かさ	4	25	9	公園
			10	街路樹
子供の遊び場	18	23	4	広場・遊び場

4．満足度，要求度および環境全体に対する評価

生活環境評価28項目の個々の五段階評価の得点化による単純集計から満足度の高い順にその順位をみると表-1に示すごとく「緑の豊かさ」は高位に、「子供の遊び場」は低位にランクされる。次にこの市民生活環境調査に関連して行なった都市施設の要求に関する調査における要求項目に解答した割合を要求度とし、割合の大きな方から順位をつけると、都市施設のうち「緑」と「遊び場」に関係する施設の要求度はいずれも高位にある。いまさらに環境全体に対する満足度を外的基準に、環境評価28項目をアイテムとして（各アイテムは良い，普通，悪いの3つのカテゴリーとした）、数量化理論第Ⅰ類により線型構造式の偏相関係数を求め、その大きな順に順位をみると「緑」，「遊び場」とも非常に低位であった。すなわちこれら2項目とも環境全体に対する満足度の評価に対して大きな寄与をなしていないのである。以上3者の関係（表-1）は次のように解釈できる。つまり、「緑の豊かさ」についてみれば満足していることに対しては環境全体を評価する際にはあまり考慮されないという市民意識のあらわれのように思える。次に「子供の遊び場」についてみればその不足に対して不満であり、その要求も強いが、環境全体を評価する場合にはあまり影響を与えないということになる。実際、北見市における子供の遊び場の地帯別構成割合は図-4に示すごとく、中心市街地では道路上が大きく、ドーナツ化現象による人口移入地域である市街地周辺では空地または道路上が大きな割合を占め、また地域的にもバラツキがあり、適正な配置系統による計画的な整備が望まれる。



図－4　地帯別遊び場構造

5．むすび

北見市における公園緑地の実態とそれに対する市民意識の分析につき述べ詳細は発表時に補足する。

この研究の実施にあたり北見市役所には資料の提供に協力を得た。記して感謝にかえる。また計算は、北海道大学大型計算センターFACOM 230-60を使用した。

参考文献　1)科学技術庁資源調査会編「これからの都市生活環境」　2)北見市「市民生活環境意識調査報告書」